

何処いずこに

根来 澤子

「ただいま」と玄關の戸をガラガラと開け、衣里が帰ってきた。あ、衣里だ、と思った瞬間、目が覚めた。夢だったのだ。覚め際に見た夢だったので目覚めたあとも、生々しく頭に刻まれていく。部屋には早春の朝の陽ざしがかすかに漂い始めていた。私はぼんやりとベッドの上で起き上がった。「夢か」とつぶやいた。本当にあつたように、しかし、目覚めると同時に消えてしまった情景を何度も思いだしていた。確かに衣里の声を聞いた。服装の記憶はないが、はっきりと「ただいま」といったのだ。衣里がいなくなつて3か月、それは私が夢でいいから会いたいと切望していた衣里の声だった。衣里が夢に出てきたことに感動した。それは不思議な、懐かしいような、幸せな感覚だった。ガウンをひっかけて玄關に出ていった。暁の冷気がさつと吹き込み、大きく膨らんだ梅のつぼみが今にも開きそうだ。もちろん人影はない。静まり返つた薄明の中、訪ねてくれる人のないことを確かめて、身震いをしな

がら再びベッドにもぐりこんだ。

それは「ただいま」という、たった一言の、本当に短い夢の出会いであつたが、私は久しぶりに心弾む想いで、もしかしたら衣里は私を認め、意識しているかもという期待をもつた。真鍮の壺に入れられ、一握の灰になつて私の寢室の、整理箆笥の上に安置されている衣里の実体。何もかも「無」でしかない絶望しきつていた私にもたらされたかすかな希望であつた。

「人間は死んだらどこへ行くのか、そもそも人間はどこからきてどこへいくのか」

このシンプルで、今なお解決のついていない深遠な問題に直面したのは、昨年12月、55歳でこの世を去つた娘、衣里の死によつてである。「メモントモリ」などという尤もらしいエッセイを書いたりしたが、場当たり的な、薄っぺらな感想でしかなかった。現実には、愛する娘がこの世から消えてしまふという事態に遭遇して、混乱の中に投げ込まれ、陰鬱な真冬の日々、終日部屋に閉じこもつて「死後の魂はあるのか」という疑問に身を削るおもいを抱いて真正面から対峙したのは、初めてのことである。

「靈魂」というと、どうしても宗教的な匂いがする。

私は、哲学も宗教学も、脳科学も、全く無学で、第一、真剣に考えたことも、興味を持つ機会もなかった。子どもころから町医者だった父が「人間は死ねば無」と言っていたのを聞いていたので「魂」とか、「幽霊」など、オカルト的なものにはあまり関心をもつことがなかった。田舎の仏教信仰に熱心な親戚に囲まれて、無信心な我が家はどことなく孤立している感じをもっていたが、祖父母の法事や墓参りなどは世間並みに行っていたので風習には従っていたのである。お寺にいても、僧侶の読経をきいても、退屈なだけで、死後の世界など想像さえしなかった。若かったせいもある。

夫が1994年、61歳で逝去してから25年が過ぎた。世間でよくいわれるようにあつという間の25年であった。当時は「癌」の告知は本人にはしらせないのが一般であり、夫は自分の病名に気付くことなく、11月末、夕焼けの美しい時刻に世を去った。当時、親しい友人が2冊の本を贈ってくれた。立花隆の『臨死体験』と、キュブラーロスの『死ぬ瞬間』である。

現在、この2冊の本は私の手元にないので読み返してはいない。しかし当時、何度も読んだのでしっかりと記憶にある。1994年出版された『臨死体験』は立花隆が世界各地を回り、事故や病気などで生死の間

をさまよって無事生還することのできた人たちを取材して、その人たちの体験談をまとめた本である。世界の地域によって多少の違いはあるが（日本ではお花畑をみた、三途の川の向こうで親しい人が呼んでいるなどが多い）臨死体験の瞬間は居心地がよく、安らかな場所のようである。しかし、体験者はあくまでも生死の間をさまよったとは言っても、結局生還した人達の経験であり、死者の言葉ではない。哲学者（本人は文筆家と呼ばれたということだが）池田晶子の言葉を借りれば「臨死体験を語る人は一人残らず生きている人である。どこまでも生きている人の言葉なのである」として言った。「そんなに知りたければ死んでみたら」と。

立花隆はその後2002年、自らも膀胱がんを病み、再び、世界の脳科学者、心理学者、精神科医などをまわり、2014年、続編を出版した。結局死ぬ間際の臨死体験は脳にあるのではと言っているが、学者の言い分も様々で、確かに死を経験した人がいない以上、あくまでも仮定の議論で結論には至っていないと思う。

キュブラーロスの『死ぬ瞬間』は死を宣告されてから受容するまでの患者の心理を精神医学的に分析したものである。そのさまざまな過程において患者は否認

し、怒り、鬱状態になるが、やがて受容し希望を持つに至るといふものである。1969年に初版発行されたこの本は2020年でなお再版されているのである。

脳科学的に言えば人が死ぬと21グラムが失われるという。1901年にマサチューセッツ州の医師、ダンカンマクドールが高齢者6人を被験者として行った研究で、死の直前、死の瞬間、死亡後の変化を記録し、最終的に体から失われた21グラムが魂の重みだとした。しかし、他の研究者が再現できなかったことで批判され定説にはなっていないらしい。

死と生の世界を行き来出来たら面白いだろうと思うがそんな時代は来ないだろう。「神の摂理」に反するものである。

私は、『みなせ文芸』の会員であり、2011年5月発行「50号」から参加している。2020年の現在、季刊誌「みなせ文芸」は「85号」を発行しているから、35冊に掲載させていたでいることになる。その間、一度も休稿したことがないから、内容はともかく真面目な同人であると自負している。入会したばかりの時の「50号」で私は忘れたい衝撃的な作品を読んだ。題名は、『靈魂の行方』（和田正美著）であ

る。和田氏は大学の教授であると同った。当時の「みなせ文芸」の会員には、大学や高校の先生が多いという話だったが、お忙しいせいも、合評会は欠席なざることが多くて、大変残念だが和田氏には一度もお目にかかる機会がなく現在にいたっている。

「肉体がなくなったら、魂はどうなるのか」という問題に対して、閑に任せて思い巡らせている昨今の私にとつて、この作品はまさにそのものずばりの回答を与えてくれた。私はこの原稿を書くにあたって、8年ぶりに再び読み返した。作品はなお新しい装いを持って私の前に立ち上がった。3か月まえに、あの世へと出向いていった娘の魂の行方をあれこれと悩ましく思い描いている現在、心に寄り添うテーマであった。『みなせ文芸』誌上、143ページに及ぶ長編を私が要約するのは大変おこがましく難しいのだが、あえて簡略に筋書きだけを追えば以下のとおりである。

『靈魂の行方』は、「人間に永世はあるのだろうか、人の魂はその人の死後もなお存続するのだろうか」という青年の疑問で始まる。20歳になった主人公近藤一洋（かずひろ）は祖母の死に出会ってこの問題に直面した。葬儀の夜、祖母の夢をみる。祖母は彼に話しかけるのだが、目覚めて、急いで和室にいつてみると、

祖母は安らかな死に顔で横たわっているだけであった。49日の夜、再び祖母が彼に語り掛けているのはつきりした夢を見る。彼は、肉体は死んでも魂は死んではいないのであるという気がした。文明人が肉体から離れた靈魂の存在を信じるなんて馬鹿げていると思っても、靈が存在しないという証拠もないのだ。23歳になった一洋は大学を卒業して食品会社に勤める。同じ課の係長が突然心筋梗塞で急死した。葬儀のとき、「謹んでご靈前に申し上げます」といった弔辞が気になった。社会的な決まり事で儀礼的に述べたに過ぎないのだが、靈に話しかけているように感じたのである。

思い立って祖母の墓参りをした。お寺の住職に出会い、話しこむ。彼はいつも心に思っていることを聞いてみた。「人間の魂は死んだらどうなるのでしょうか。」住職は「宗派によって独自の教えがあるが、すべて生きていく人間が想像したもので本当のところは死んでみなくてはわからないのですよ、わたしはあいにく死んだことがないのでね」と笑い飛ばす。一洋はもうすこし宗教家らしい言い方ができないのかと不満だった。その後、平凡な毎日が続く一方、「人間に死を超えた生はあるのだろうか」という疑問がますます膨らんでいった。

そんなある日、偶然出会った大学時代の文学部出身の友人に同じ疑問を投げかける。「日本の文学者は人間が死んでから入っていくかもしれない状態のことをどう考えているのか」と聞いた。彼は中江兆民の絶筆『一年有半』を挙げる。この作品は「一名無神無靈魂」という副題があり、「人間が死んだら意識も死ぬ。不滅の靈魂なんてありえない」という。明治時代に書かれたこの本は難解であり文庫の註やら辞書やらに頼って読んだが、要は、靈魂の不滅を認めないということとで、神の存在と靈魂の不滅を同列において否定し、徹底した物質的学説を主張している。彼に従えば精神は肉体の作用に過ぎず、人死すれば直ちに消滅するというのであった。しかし肉体はその身体を構成した元素の中で気体そのものは空中を飛翔する禽獣に吸収されたかもしれない、その個体は地中の水に溶解される人参大根に摂取されて誰かの腹の中に入ったかもしれないのである。（名作童話『葉っぱのフレディ』の世界である。）

これを読んで一洋は兆民に共鳴し、真実が明らかにあって、自分の迷いが去ったと思うに至った。しかしそれもつかの間、彼の中で兆民の權威の揺らぐことが起きたのである。

その事件とは、駅のホームでやくざ風の男が初老の紳士の胸倉をつかんで足を踏んだと言いがかりをつけていた。アメリカ人の男性が仲裁にはいった。彼はホームに突き落とされた。ちょうどその時電車が入ってきて彼は即死したのである。彼の妻は日本文学の研究者であった。夫を死に追いやったにもかかわらず、男の滅刑運動をする。彼女は言う。「主人は死んだとはいえ、永久に姿を消したのではなく、私が住んでいるこの地上にいなくなっただけのこと。あの人は神に召されて天に行き、そこでいきているのです。神を信じている限り魂は不滅です」と。

かくして一洋の頭の中では兆民とアメリカ女性のピューリタンとしての正反対の思想のせめぎあいが始まるのである。一洋はキリスト教の聖典である旧約聖書と新約聖書の勉強を始める。しかし、大雑把な教義を知った時、それを素直に受け入れることはできなかった。キリスト教が2000年の昔から今日に至るまで多くの人に生の原理を提供したことは共感を覚えるが、心底から納得することはできなかった。

次に一洋は仏教に取り組む。インド、中国、日本を中心として2か月の間調べた結果、呆然とする。この教義の概略すらすらかむことはできなかった。輪廻の思

想は、人は死ねば肉体は滅びるが、精神は残り、新しい肉体を得て、生まれ変わる。要するに人間の個我は死を乗り越えて生きるというものである。阿弥陀如来と釈迦の関係など、様々な矛盾に突き当たり、この大宗教はわからないという結論に達した。

その間にも、新幹線で知り合った老婦人から先祖崇拜の習慣の話を知りたり、または、ある年、冬山で遭難しそうになった青年の話、亡母に導かれて無事救出されたという挿話が続く。

一洋は会社員として業務をこなしてきたが、これだれにも打ち明けられない疑念があまりにも大きく膨れ上がり、ついに職を続けることができなくなる。ちょうどそのとき、彼は現実にも母の死に出会う。くも膜下出血であっけなく亡くなるのである。母の死がきっかけになって彼は人間の死後の魂の行方をとことんまで追求する決心をして会社を辞め、自由な時間を使えるアルバイトとして宅配の仕事をする。その業務の中で出口善太郎という人物に出会う。それは彼が以前から読みたいと願っていた「死後の魂はどこに行くのか」という論文の著者であった。彼は面会する機会に恵まれ、率直に疑問を投げかけた。「先生ご自身は死後の魂の存在を信じていらっしゃいますか」。その問いに出口

は答えた。「死後の魂なんてとんでもない、そんなものはあつてほしくない、もしそれがあつたら生前の意識を死後にまで持つことになり、馬鹿げた人生についての意識を曳きづつて生きなおすことになる、私は残らないほうを選ぶ」。

一洋はその後も、古代エジプトの死生観、プラトンの著作などを読む。勉強するほどに死後の生の存在を知りたいという願いは激しく燃え盛っていった。ある日の新聞に「どうすれば増加する自殺を防げるか」という座談会が乗った。そのうちの一人が「古代のギリシヤかローマで名前は忘れたが、ある哲学者が靈魂の永遠不滅という確信に到達して山だか崖だかの高い所から飛び降りたことがあつたそうだ」と発言した。もう一人が言った。「それは哲学的思索をかさねた結果としての覚悟の死だから世をはかなんだ末の自殺とは同一視することはできない」と。一洋はこの箇所を読んだとき、パツと頭の中が明るくなったような気がした。実践あるのみであつた。その導き出すものが、靈魂の完全な消滅であるならそれでもいい。靈魂が新しい次元の生の中に置かれるのであればそれも結構である。人間の死後の在り方についてのもの思ひはもはや彼を圧迫しなかつた。彼は3月下旬の某日を期して江の島

の海に飛び込む決心をする。

鎌倉のホテルで一泊し、30通の遺書を書く。「僕は死後の生があることを信じていれば死んだりはしません。大抵の人がそうであるようにそれを信じて居なければやはり死んだりしません。僕にとつて死ぬことは実は生きることなのです。決して生きること嫌気がさしたから死ぬのではないことを理解してください」。そして一洋は江の島の崖の周囲をさまよい、自分に言い聞かせるのである。「自分は生死にまつわる秘密を極めるために生まれてきたのであり、それが明らかになる瞬間を今や迎えようとしている」。

そして次の文章で終る。「天が迫ってくる、海が迫ってくる、抗しがたい力が自分を引き寄せているように感じられる。(略)やがて水と魂が一つになり、一洋は言うに言われぬ境地に導かれた」。

長々と要約させていただいた。不備もあると思うし、私の解釈が独断的で、違っている箇所があつたら申しわけないことであるが、大筋において、一洋は命を賭けて「靈魂の行方」という神秘にいどんだ。そうして彼は生と死の狭間に何をみたのか。彼に教えてほしいと切に願うが、結論を我々は残念ながら手に入れるこ

とができない。実験したとたん、一洋はもはやこの世にはいない。彼岸へと去って行ってしまったのだ。まさに人生不可解である。

話題はそれるが、私は昭和30年代の前半に学生時代を過ごした。当時、「藤村操」という自殺した第一高校生(旧)のことが話題になっていた。藤村操は明治時代に生きた学生だから、かなり以前の出来事で、令和に入った現在、ほとんど忘れ去られているとおもうのだが、昭和30年代にあっては生々しく記憶に残るショッキングな出来事であった。

藤村操は学者の家庭に生まれ、恵まれた環境に育った俊才であった。夏目漱石の弟子ともいわれている。彼は旧制第一高校(現在東大)の学生であった17歳のとき、日光華厳の滝に飛び込み、命を絶った。「巖頭の感」という次の遺書を残して。

「(略)万有の真相は唯一言にて盡す。曰く「不可解」。我この恨みを抱いて煩悶、ついに死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで、胸中何らの不安あるなし、初めて知る、大いなる不安は大いなる樂觀に一致するを」

17歳の青年が書いた純粋に哲学的な内容の遺書と

自殺は、新聞各社で報道され、世間を騒がせた。「人生不可解なり」というのが流行語のようになった。17歳の彼の思索がどのようなものであったか、おそらく青年期独特の純粋無垢な「生きる悩み」だったのである。

私も今や「靈魂はあるか」という疑問が、折に触れ頭から離れることがない状態である。空を眺め、山脈を仰ぎ、星空に感動しては「死後の世界はあるか、死ねば先に逝った娘に会えるのだろうか」という疑問に埋もれている。最近は矢作直樹という東大の救急医療の教授が死後の世界を肯定的にとらえる本を出版していると知った。まだ読んでいない。やはり死んでみなければ分からないという真理は動かしがたいだろう。「死」とはいかなるものか。私の愛する娘、衣里は何処に。「何処に？」と問い続けている。「衣里」という姿をもった肉体が消滅したことは事実だが、「魂」に形はあるのだろうか。あるのなら、どのような形を持って何処に在るのだろうか。

「あなたの傍にいる」と宗教家はいうが、私も近藤一洋のように確かめたい衝動がある。肉体から抜けかけた「魂」に実体があるのならこの目で確かめたい。しかし、今更自分で実行しなくても、遅からずその時

がやってくる年齢でもあるのだから、慌てる必要はない。まったくの未知の、大いなる体験、死後の世界を見るのもそう遠くはないだろう。

「死も又たのしからずや」である。

(2020年3月)、

